



えと文
谷川修三

蠟梅 (ろうばい)

桜が盛りの春の一日、北野天満宮に梅を見に行った。あざやかな緑色の若葉が出はじめており、もちろん花は残っておらず、私も別に花を見るつもりではなかった。日曜日であったが人はあまりおらず、梅花祭の頃の出出が嘘のようであった。

ここにはロウバイと呼ばれる梅がある。ロウバイは花が蠟細工に似ているので蠟梅とも書き、臘月つまり十二月頃咲くので臘梅とも書く。花びらが少し黄ばんで蠟のような光沢があるとき、よい匂いがあるという。二月の初めに花を見に来たときには、他の梅が、ちらほら咲き始めたところだというのに、もうしおれてしまっていて、いささか残念な思いをしたのだが、この日は他が若葉を枝一杯に出しているのに、この木だけはほとんど葉をつけていなかった。なんとなく変な梅だなと思いつつスケッチをし終え、帰りに隣の平野神社に立ちよってみると、ここは桜が満開で、境内は酒宴の人出であふれていた。

(中学校教諭・美術)